

校長室から

第13号

二宮金次郎の像について ~その5~

1940年（昭和15年）我が国は紀元2600年という国家イベントを迎えます。

「像の普及は富山県の銅器製造業者たちが不況脱出のために金次郎の銅像を販売した系譜と、愛知県岡崎の石屋たちによるものがあつた（まさに報徳運動が突出して盛んだった二県）。彼らは全国小学校長会に実物を持ち込んだり、文部大臣を賛助会員とする「二宮尊徳先生少年時代之像普及会」を組織したりして営業活動を展開した。ちょうど金次郎生誕一五〇年（昭和12年）、皇紀二六〇〇年（昭和15年）というイベントと重なり、それを好機としてよく売れた。地元の学校に金次郎像を寄付するのが流行った」時代だったのです。富山県『置県百年富山県』（1983年）には「報徳教育から生涯学習へ」、「報徳教育県」という文章が掲載されています。また、現在でも富山県高岡市で作られる高岡銅器は、我が国における銅器生産額の95%を占めています。

全国の金次郎像にとって、この頃が最も幸せな時代でした。その後3つの大きな受難の時代を迎えるのです。

最初のそれは、いきなりやって来ました。「1941年（昭和16）年8月30日、戦局悪化・軍需物資不足に伴い金属類回収令が制定され、これに基づき寺の仏具・梵鐘、家庭の鍋・釜はもちろん金次郎の銅像も例外に洩れず鉄砲や大砲の弾等に化けた」、「金属類回収令によって、銅像は校庭から出征していくこととなった。国によって模範的な偉人に祭りあげられた金次郎は、哀れなことに、最後にはお国のために身を犠牲にして（武器弾薬と化して）消えていった」のでした。

次は、戦後GHQの指令により、奉安殿と二宮金次郎像が共に廃棄されていきます。ただし、1946年（昭和21年）、尊徳が占領下の日本銀行券（1円券）の肖像画に採用されています。これは、二宮尊徳を民主主義の先駆者として評価していたためと考えられます。「1949年（昭和24年）、



お札になった二宮尊徳

GHQ新聞課長インボーデン少佐は、『二宮尊徳を語る～新生日本は二宮尊徳の再認識を必要とする』を書き、その第1節に日本が生んだ最大の民主主義者と述べている。このことは、GHQ内に二宮尊徳を廻る見解の相違があつたことを証左して」います。

そして、金次郎が像のように実際に薪を背負ったまま本を読んで歩いたという事実が確認できないことと、児童が像の真似をすると交通安全上問題（現在の歩きスマホといったところでしょうか）があることから、1970年（交通戦争のピーク）以降、校舎の立替時などに徐々に撤去され、像の数は減少していきます

では、本校の金次郎像はどうやって時代の荒波を乗り越え生き延びてきたのでしょうか。